

ゴッホ作「ローヌ川の星月夜」に描かれた星について

石坂 千春*

概要

V. ファン・ゴッホ作「ローヌ川の星月夜」(オルセー美術館蔵; 1888年9月)に描かれているのは北斗七星だと長年思われてきたが、今回、新たに天文学的考察を加えた結果、別の星「秋の大びしゃく」を描いた可能性が浮上したので報告する。

1. 見えないはずの北斗七星

「ローヌ川の星月夜(Starry Night over the Rhone)」という絵(図1)をご存知だろうか？

星空を描いた数少ない画家の一人であるV. ファン・ゴッホ(1853.3.30-1890.7.29)[1]が1888年9月下旬、南フランスのアルル(北緯は北海道と同じ43度くらい)で描いた作品である。

絵の中央には“ひしゃく”の形に並んだ7つの星「北斗七星」が描かれているが、実はこの絵は、ローヌ川の東岸から南南西～南西方向を臨んで描かれたことが分かっている [2] (図2)。したがって、本当は、この絵のように北斗七星が見えることはない。



図1「ローヌ川の星月夜」

(ファン・ゴッホ1888年、オルセー美術館蔵)

1888年9月28日付の弟テオへの手紙の中に、「ローヌ川の星月夜」についての記述がある。南仏アルルのローヌ川の東岸から南西方向を臨んだ構図で描かれている(右奥がトランタイユ橋)。

これまでの研究では、ゴッホは南西の方角を向いて地上の風景を描き、星空については9月下旬の22時頃の北北西の方角を描いた、と解釈されてきた(たとえば[3])。



図2上:「ローヌ川の星月夜」を描いた場所下:

現在の様子(いずれもGoogle Mapより)

“黄色い家”から100mほど北西のセゴノ一通(ローヌ川東岸)から南西方向を臨むと、手前に船着場があり、右奥にはトランタイユ橋が見える。正面に小さく“塔”が見える。ローヌ川は北から南西に流れの向きを変えている。街灯も当時の面影を忍ばせる。

*大阪市立科学館学芸課/中之島科学研究所
<http://www.sci-museum.kita.osaka.jp/~ishizaka/>

しかし、なぜゴッホは、別々の方角の空と地上を一つの絵にまとめたのだろうか？

秋、南西、ひしゃく星…ふと「ローヌ川の星月夜」に描かれた星についてひらめいたものがあったので紹介したい。

2. ファン・ゴッホについて

まず、ゴッホの生涯について簡単にまとめておこう。

オランダの牧師の子として生れたゴッホは25歳の頃まで、牧師になることを目指していた[1]。当時は、牧師による文化的主導が盛んだったドミノクラシーの時代であった。一方、自然こそが神の御業であり、それを読み解くことこそが神の御心に近づくことである、という“自然宗教”も興隆していた。

1880年、牧師になることをあきらめたゴッホは、「宗教」と「自然」という対立の矛盾を抱えながら、画家を目指すことになった。

当初、宗教的題材を描いていたゴッホは、1887年頃から自然をモチーフにするようになり、神の象徴として太陽を、信仰心の表われとして向日葵を描いた。星空を描いたのも、ゴッホにとっては宗教的行為というべきものであったらしい。事実、ゴッホは1888年9月28日付の弟テオへの手紙[4][5]の中で、こう述べている。

「とにかく、どうしても、ぼくには宗教とでも言うべきものが必要だーだからぼくは夜、外に出て星を描く・・・」

「ローヌ川の星月夜」は、そのような時代に描かれたものである。そういう観点から「ローヌ川の星月夜」を眺めると、遠景に小さく描かれた教会らしき塔をはさんで、水面に長く映った13本のガス燈の光柱が、なんらかの宗教的意味を持つのではないかと推測することもできる。川幅が200m以上あるローヌ川の水面に、電灯よりはるかに暗いはずのガス燈の反射光が、不自然なほど長く明るく描かれている。「13」というのは、イエス・キリストと12人の使徒を合わせた数である。

1889年から晩年にかけて、画家仲間との共同生活の夢が破れ、精神を病んだゴッホは再び宗教的題材である教会を描くようになった。

ゴッホは写実派の画家と見なされることが多いが、見たままを忠実に描いていたわけではない。ゴッホの代表作であるニューヨーク近代美術館所蔵の「星月夜」(1889年)が実景をもとに描かれたのではなくアトリエで構成された絵である[1]ことから分かるように、ゴッホは自然の中にモデルを求めて写實的に描きつつも、“最も善いと思えるもの”を求めて、実景に、理想的な配置への変更を加えてもいたのである。

3. 「ローヌ川の星月夜」に描かれた星

では、「ローヌ川の星月夜」も実景に大きく手を加え

て描いたものだろうか？

第1章で述べたように、「ローヌ川の星月夜」では、ひしゃくの形に並んだ7つの星・北斗七星が正面で目をひく。

しかし、北斗七星(おおぐま座のお尻からしっぽにかけての7つの星)はその名のとおり、常に北よりの空にあるため、この絵の構図のように、南西の空に北斗七星が見えることはない。

だが、前出の9月28日付の手紙には「ローヌ川の星月夜」について、たしかに、こう書かれている[4][5]。

「群青色の夜空に、おおぐま座は緑と薔薇色に輝き、その控えめな淡いキラメキは殺伐としたガス燈の黄金色と対照をなしている。(Sur le champ bleu vert du ciel la Grande Ourse a un scintillement vert et rose dont la paleur discrète contraste avec l'or brutal du gaz.)」

つまり、ゴッホは、意図的に北斗七星を描いたことになる。

なお、本文中の la Grande Ourse はおおぐま座のことであるが、おおぐま座で特に目立つのは北斗七星であり、当時の星座の本でも、おおぐま座(la Grande Ourse)として北斗七星だけを表記することがあったようだ[6]。したがって、以降では、ゴッホの手紙における「la Grande Ourse」は北斗七星を指していると考えことにする。

さて、なぜゴッホはローヌ川の上、南西の空に、角度にして130度以上も離れた北よりの空の北斗七星を描いたのであるだろうか？この画の構図の着想を得たキッカケは何だったのだろうか？

まず、実際の恒星データと「ローヌ川の星月夜」に描かれた星とを比較してみた。

3-1. 描かれたのは本当に北斗七星か？

実は「ローヌ川の星月夜」に描かれたのが北斗七星だとすると、実際の星空と一致しない点があり、方角の他にいくつかある。

ゴッホが表現する星の明るさと色が北斗七星とは違っているのだ。

北斗七星を構成するのは、おおぐま座の α 星から η 星までの7つの恒星である。図3、図4のように星に番号を振り、その等級とスペクトル型を表1にまとめた。北斗七星の特徴は、ひしゃくの柄と枡の境目にある星④が他の星に比べて暗いことと、大半が白い星であることである。

ところが、「ローヌ川の星月夜」(図1)を見てみると、星④が最も明るく(大きく)描かれている。逆に、北斗七星では最も明るい星①が、「ローヌ川の星月夜」では比較的暗く(小さく)なっている。

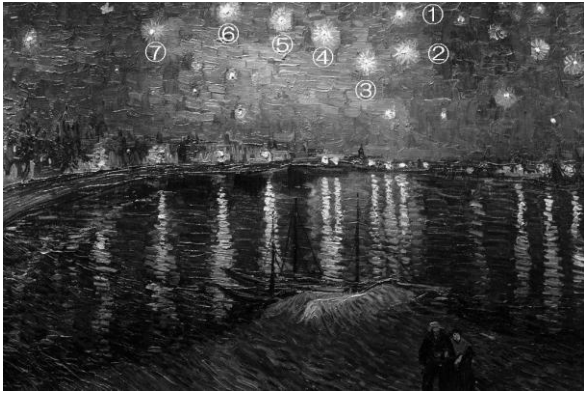


図3 「ローヌ川の星月夜」に描かれた星ひしゃくの注ぎ口(絵では右側)の星から番号①～⑦を振る。

表1 北斗七星(図4)の色と明るさ[7]

番号	名称	等級	型	色
①	α UMa	1.8	F0	黄白
②	β UMa	2.4	A1	白
③	γ UMa	2.4	A0	白
④	δ UMa	3.3	A3	白
⑤	ϵ UMa	1.8	A0	白
⑥	ζ UMa	2.3	A1	白
⑦	η UMa	1.9	B3	青白

※UMa はおおぐま座の略

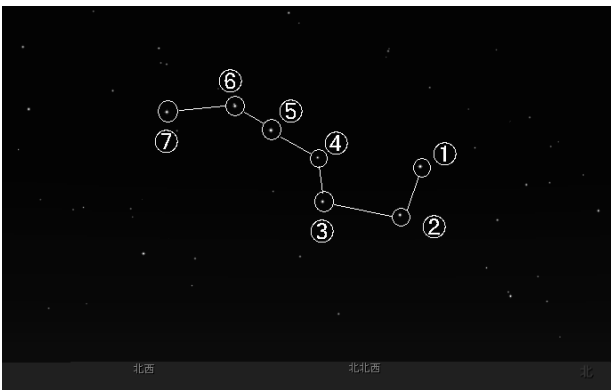


図4 北斗七星(ステラナビゲータで南仏アルルにおける1888年9月16日午後9時の北北西の空を再現し作図:以降の星図もすべてステラナビゲータで作図している)。北斗七星は常に北の空にあり、星②と①をつないで5倍のばすと北極星を見つけられる。

また、前出の9月28日付の手紙にもあるように、ゴッホは、北斗七星が「緑と薔薇色に」輝いている、と書いているが、北斗七星を構成するのは、白い星5個、黄白色の星1個、青白い星1個である。薔薇色をした(赤い)星は1つも無く、ゴッホの記述とは一致していない。

ゴッホは、星の色に対して無頓着だったわけではない。むしろ非常に注意をはらって星空を見ていた。そ

の証拠に、1888年9月16日付の妹ウィルへの手紙には、こんな記述がある。

「今、絶対に描きたいのは星空だ。夜は昼よりもずっと色彩豊かなのだよ。…(中略)…よく見れば、ある種の星はレモン色、他の星は、ピンク色、緑色、青色、勿忘草の色に輝いている。」

そんなゴッホが、白い星から構成される北斗七星を、「緑と薔薇色に輝く」と表現するとは考えにくい。

ところで、夕日のように地平高度が低い天体が赤くみえることがある。レイリー散乱によって青い光が相対的に弱くなるためだ[8]。

「ローヌ川の星月夜」に描かれているのが北斗七星だとすると、その地平高度は10～15度と見積もられる[3]。この高度では可視光の長波長側(0.7 μ m)は81～86%透過するのに比べ、短波長側の0.4 μ mの光は、12～24%しか透過せず“赤っぽく”なる。

しかしながら、レイリー散乱によって北斗七星が赤く見えることはない、と思われる。大気減光が効いているためだ。地平高度が10～15度の場合、1等級ほど減光を受け[9]、北斗七星の星々は全て3等級以下に光度が落ちてしまう。肉眼で色を識別できる星の明るさ限界は1～2等級だといわれている[11]。3等級まで減光してしまえば、ゴッホが超人的な視力の持ち主でないかぎり、色を見分けることができない。

なお、前述の妹ウィルへの手紙だが、ゴッホが絵の上で星の色を塗り分けていたことは意味しないと思う。ゴッホは外でスケッチし、アトリエで彩色していた。ガス燈は暗すぎて、絵の具の色を見分けられなかったのである。

明るい室内で絵の具を塗りながら窓の外を眺めて星を見た場合には、星の色はほとんど見分けがつかず、白っぽい星として見えたことだろう。また後述のように、明るい月が出ている場合も星の色は見分けにくくなる。

妹ウィルへの手紙や弟テオへの手紙にある星の色についての記述は、屋外で、目が暗闇に慣れた状態で星を見た時の印象を表現したものと考えられる。どちらもゴッホ自身が残したものでもなく、手紙の記述と、絵の表現が異なっていることも、謎を深くしている。

ゴッホは、北斗七星に関する手紙の表現と「ローヌ川の星月夜」での描き方との齟齬について何も語っていないため、本当のところは分からないが、秋の星空を見上げながら「ローヌ川の星月夜」を思い浮かべた時、一つの仮説がひらめいた。

「ローヌ川の星月夜」に描かれているのは、北斗七星ではないのではなからうか！?

3-1. もう一つの可能性「秋の大びしゃく」

実は、星空には「ひしゃく」の形の星の並びが、北斗七星の他にあと3ヶ所ある。

1ヶ所目は、夏の夜の南の空に見える「南斗六星」(いて座)である。南斗六星は形も見え方も星の数も「ローヌ川の星月夜」とは一致しない。

2ヶ所目は「小びしゃく」(こぐま座)であるが、こちらは暗い上に、常に北の空にあるため、やはり除外される。そして、もう1ヶ所が「秋の大びしゃく」である。秋の大びしゃくはペガサス座 α 、 β 、 γ 星～アンドロメダ座 α 、 β 、 γ 星～ペルセウス座 β 星を結んでいる(7つ目の星をペルセウス座 α 星とすることもある)。すべて2等級台である7つの星が秋の空に、北斗七星とそっくりな形で並んでいる(ちなみに、秋の大びしゃくを使っても、北斗七星と全く同じ方法で北極星を探すことができる！)。

秋の大びしゃくは日本ではあまり知られていないが、冬季も20時くらいに西空～天頂に見えるので、探してみたい。

「大びしゃく」というだけに、角度にして北斗七星の1.5倍ほどの大きさがある。プラネタリウムでは実際の空よりも小さく感じるため、秋の星空が映し出された時、ひしゃく形の星の並びに気づき、「あ！北斗七星だ！」と叫ぶ子どもがいる。また、星空観察会などで、秋の星空の目印である「秋の四辺形(ペガサスの四辺形)」を探し、そこからアンドロメダ座、ペガサス座とつないで北斗七星のようなひしゃく形になることを紹介すると、そのあまりの大きさに皆一様に「ほう！」と驚く。

北斗七星の見ごろは春、そして秋の大びしゃくの見ごろは秋。正反対の季節に、7つの星が同じような形に

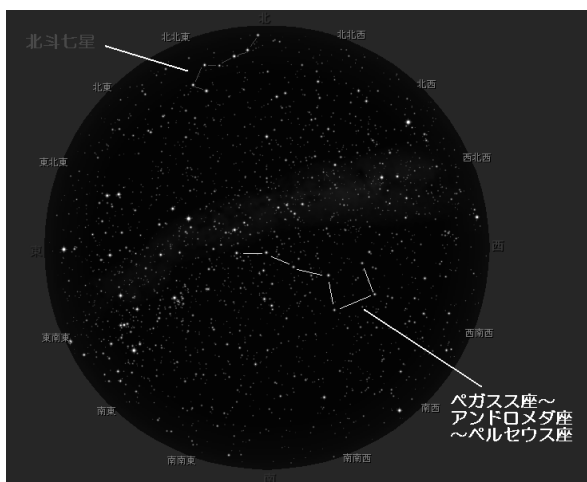


図5 「秋の大びしゃく」(ペガサス座～アンドロメダ座～ペルセウス座)が9月の未明には南西の空に見える(ステラナビゲータで南仏アルルにおける1888年9月16日午前3時の空を再現し作図)。「秋の大びしゃく」の水汲み口(柄)の部分は「秋の四辺形」として知られている秋の星空の目印である。

表2 “秋の大びしゃく”の色と明るさ[7]

番号	名称	等級	型	色
①	β Peg	2.3	M2	赤
②	α Peg	2.5	B9	青白
③	γ Peg	2.8	B2	青白
④	α And	2.07	B8	青白
⑤	β And	2.07	M0	赤
⑥	γ And	2.2	B8	青白
⑦	β Per	2.10	B8	青白

※Peg はペガサス座、And はアンドロメダ座、Per はペルセウス座の略



図6 「秋の大びしゃく」の星

並ぶというのは偶然にしても、なんとも粋な自然の気まぐれである。

この「秋の大びしゃく」が、「ローヌ川の星月夜」の制作時期とされる9月には、深夜～未明の南西の空に見えるのである(図5)。

秋の大びしゃくを構成する星(図6)の明るさと色を表2にまとめた。

表2から分かるように、秋の大びしゃくは星④が最も明るい。もしも「ローヌ川の星月夜」に描かれたのが秋の大びしゃくだとすると、絵の表現と合致する。

また、秋の大びしゃくは青白い星(人によっては緑色に見えることがある)5つと、赤い星2つから構成されている。赤い星は、ひしゃくの注ぎ口の星①と“柄”の2番目の星⑤である。星⑤は前述の星④とならんで明るいですが、星①は2.3等級と比較的暗いので、赤い色と相まって小さく感じるかもしれない。

ゴッホの視力については記録が残っていないが、画家としての資質から想像すれば、どちらかといえば目は良い方だったと考えられる[14]。電灯がまだ発明されていない120年前のアルルは非常に暗いので、月明かりのない夜(後述)ならば、2等級の明るさがある秋の

大びしゃくの星の色について、「赤っぽいのか、青っぽいのか」、ゴッホは十分見分けられたことだろう。

つまり、ゴッホの9月28日付のテオへの手紙の記述「おおぐま座(北斗七星)は緑と薔薇色に輝き、…」が、本当は「秋の大びしゃく」を見た時の印象を表現しているのだとすると、星の色についての矛盾が解消する。

さらに、「ローヌ川の星月夜」に描かれている他の星も、秋の大びしゃくの周りにある実際の星と同定できるものがある(図7:※位置関係の不一致については次章で述べる)。

特に注目すべきは、絵(図1)の左上隅にある白いモヤモヤである。この白いモヤモヤだけ、他の星とは描き方が異なり、“芯”が無く、“光芒”も点対称ではない。これは、おうし座の「すばる」(プレアデス星団)と呼ばれる星の集団ではなかろうか！ そうだとすると、その左側(絵の左端)にある星は、おうし座の一等星アルデバランであろう。また、絵の右上隅、4つの小さな星が(ベンツのマークのように)集まっているところは、みずがめ座の「三ツ矢」(みずがめ座の π , ζ , η , γ 星)ではなかろうか！？

つまり、ゴッホは南西の空で秋の大びしゃくを見て、「ローヌ川の星月夜」の着想を得たのではないか？これが筆者にひらめいた仮説である。

ただ、この仮説には大きな問題が2つある。

1つは、秋の大びしゃくが南西の空に見えるのは9月下旬では深夜～未明である、ということである。ゴッホが1888年9月頃、未明まで起きていて、秋の大びしゃくを見た可能性はあるのだろうか？この問題と関連して、絵を描いた日付と月齢についても検証する必要がある。明るい月の有無が星の色や見え具合を左右するからだ。

2つ目の問題は、絵に描かれたひしゃく星の形や向きが秋の大びしゃくよりは、やはり北斗七星の方によく似ていることである。

これはどう解釈したらいいだろうか？

4. 検証

4-1. ゴッホは「秋の大びしゃく」を見たか

ゴッホが1888年9月頃、未明まで起きていて、秋の大びしゃくを実際に見ていた可能性について検討してみよう。

大阪市立近代美術館建設準備室の小川主任学芸員によると[14]、1888年9月8日付のテオへの手紙に、「3日間、夜に起きて絵を描き、昼間寝ていた」という記述があるそうである。

「ローヌ川の星月夜」が描かれた1888年、ゴッホは「あこがれの日本を思わせる」[1]南仏アルルに移り住み、画家仲間たちとの共同生活を夢見ていた。これか

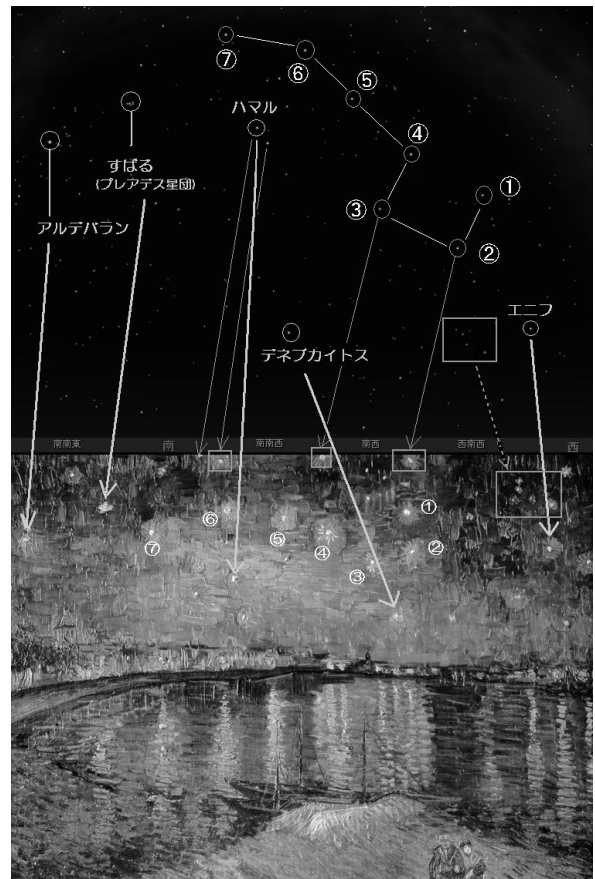


図7「秋の大びしゃく」付近で、「ローヌの星月夜」(図1)に描かれたものと同定できそうな星々。左(南)側に、おうし座の一等星アルデバランと、散開星団“すばる”(プレアデス星団)が見えるが、どうも異なる時刻・方角の星が混在しているようだ。

ら始まるはずの理想の生活に興奮し、創作意欲に燃えていたゴッホが、遠足前日の小学生のように夜更かしをしたり、朝早く目覚めたりしたことは十分にありうる。また、「ローヌ川の星月夜」を描いてから数ヶ月たって“耳切り事件”を起こした後の1889年1月9日付のテオへの手紙には不眠を訴える記述がある。翌1889年6月には、明らかに未明の空を描いた「星月夜」(ニューヨーク近代美術館蔵)が制作されている[15]。

さらに、ゴッホが癲癇(てんかん)の一種を患っていたことも分かっている[16]。癲癇の発作は睡眠不足によって引き起こされたり、逆に夜間の発作によって睡眠が妨げられたりするそう。絵を描いていて睡眠不足になった、あるいは発作が起きるのを恐れて夜遅くまで起きていた、ということもあっただろう。

こうしたさまざまな傍証が、1888年9月、未明の南仏アルルの南西の空で、実際にゴッホが秋の大びしゃくを見た可能性を支持している。

4-2. 1888年9月の月齢

では、月明かりはどうだっただろう？

3.2節でも述べたが、もしも明るい月があれば、星の色は判別しにくくなる。邦題は「ローヌ川の星月夜」だが、ここでの「星月夜」は、月が無く、星明かりが月のように明るく感じる暗夜のことである(ややこしいが、これまで何度か触れたニューヨーク近代美術館所蔵の「星月夜」では、月と星が描かれている)。絵にも手紙にも月のことが書いてないということは、「ローヌ川の星月夜」は月の見えない夜(時間帯)に描かれたのであろう。

そして1888年9月28日付の手紙に絵の記述があることから、「ローヌ川の星月夜」が描かれたのは、それより前の日付のはずである。

1888年9月の月齢を調べてみると、6日が新月、20日が満月であった(表3、表4)。上弦～満月～下弦の頃、月明かりは星を見るのに邪魔になる。また、満月を過ぎると、ほぼ一晩中、明るい月が出ている。

9月1～12日は北斗七星にとっても、秋の大びしゃくにとっても月は邪魔にならない。

12～17日は、北斗七星には悪条件、秋の大びしゃくに対しては好条件が続く。

17～28日は秋の大びしゃくにとって悪条件だが、宵のうちには北斗七星に好条件である。

星の色について記述した手紙の日付が9月16日なので、月明かりのない16日までに星空を見て星の色を観察し、28日までに絵を仕上げたと推測できるだろう。絵の星が白く描かれているのは、月明かりがあった夜に彩色したからかもしれない。

表3 1888年9月の月の出入りと月齢

日付	月の出	月の入	月齢	相
9/ 6	06:11	19:38	0.3	新月
9/13	14:36	25:01	7.3	上弦
9/20	19:16	06:21	14.3	満月
9/28	23:38	14:11	22.3	下弦

※ステラナビゲータでアルル(北緯43.6度、東経4.6度)における値を計算した(相は目安)。

表4 1888年9月、月明かりの有無

日	北斗七星	秋の大びしゃく
1	○	○
6	○	○
12	23時頃まで×	○
16	AM3時頃まで×	AM3時以降○
27	22時頃まで○	×

○：月が邪魔にならない、×：月が邪魔

4-3. 「秋の大びしゃく」と北斗七星

さて、秋の大びしゃく仮説の最大の問題は「ローヌ川の星月夜」に描かれたひしゃく星の配置が、実のところ、秋の大びしゃくとは異なっている、ということである。絵の中のひしゃく星は3.1節で述べたように地平高度が10～15度で、地平線にほぼ平行に横たわっている。その形や傾きは先行研究のように、9月下旬の22時頃の北北西の方角に見える北斗七星の配置と(方角を別にすれば)ほぼ一致する[3]。

一方、秋の大びしゃくは、南西の空にある時でも見上げるような高さ(地平高度40～80度ほど)であり、かつ、柁を下に、柄を上にして、地平線に対して左(東)上がりに大きく傾いている(図7)。

絵の中の他の星との位置関係も実際の空とはあまり合わないようだ(同じく図7)。

どうも「ローヌ川の星月夜」は方角や時刻の異なる星空を混在させて描かれているように思える。

すなわち、背景(“すばる”や「三ツ矢」のあたり)は9月下旬の深夜～未明にかけての南～南西の星空を反映して地上の風景とともに描かれ、一方、絵の中央には22時頃の北天の北斗七星を配置している。

絵の上端に3つ星が並んでいるが、これは左から、おひつじ座β星、ペガサス座γ星(図6の星③)、ペガサス座α星(同、星②)であろう。つまり、本来の秋の大びしゃくは、この絵の画角では、柁の底だけがギリギリ見えている感じである。これではまるで星空のモンタージュだ。

とても不自然で、「秋の大びしゃく」仮説を棄却したくなるかもしれない。

それでもなお、私はゴッホが秋の大びしゃくを見たことをキッカケとして、「ローヌ川の星月夜」の構図を思いついたらと考えたい。

なぜなら、ゴッホにとって、北斗七星と秋の大びしゃくは同一性をもった、一対の星の並びであった可能性があるからだ。

というのも、ゴッホがフラマリオン[6]の著作から星空の絵の着想を得たとする説があるのだ[17]。

文献[6]の7章ではペガサス座が取り上げられているが、その図114には、北極星を挟んで対峙する2つのひしゃく:北斗七星と秋の大びしゃくが描かれている[18]。説明文の一部を引用する:ことほど多様な天球の世界で、大小の違いはあっても、かくも似た形を見出すことができるとは、なんとも奇妙なことだ。

ゴッホがボイム[17]の言うようにフラマリオン[6]の著作を読んでいたら、秋の大びしゃくを見てすぐに北斗七星を連想し、北の空を振り返って北斗七星を見たことだろう。そして、ここにまたキリスト教的な数字が現れる。2つのひしゃく:北斗七星と秋の大びしゃくを形作

る星の数の合計は「14」。イエスとマリアと十二使徒の数なのである。

ゴッホは1888年9月未明の南西の空高くに秋の大びしゃくを見出したことをキッカケとして南西の空に北斗七星を描く「ローヌ川の星月夜」の構図の着想を得た。そして、宗教的な意味合いも込め、天空の2つのひしゃくを1つの絵に納めるため、秋の大びしゃくの星の配置、高さ、地平線に対する傾きを、北斗七星に似せて描き加えたのではなかろうか。

5. 結語

圀府寺司氏の著書[1]には、「ファン・ゴッホは原則として現実に見ることのできるものしか描かない・・・(後略)」とある。

ゴッホは想像ではなく実際に星空を見て、「現実に見ることのできるもの」(北斗七星と秋の大びしゃく)を組み合わせ、ゴッホにとっての理想的な配置に変換して、「ローヌ川の星月夜」を描いた。「ローヌ川の星月夜」に描かれているひしゃく星は北斗七星であり、同時にゴッホにとっては「秋の大びしゃく」でもあったのだ。

1888年9月、ゴッホは画家仲間たちとの共同生活という夢を星々に託し、実現すればゴッホにとっての理想郷となるアルルに集う画家仲間たちの象徴として、どうしてもローヌ川の上に北斗七星を描きたかったのである。「ローヌ川の星月夜」について説明した9月28日付のテオへの手紙には、そのことをうかがわせる記述がある。

「一だからぼくは夜、外に出て星を描く・・・そして生き生きとした友の姿を描いたこんな絵を、いつも夢見ている」

北斗七星そのものはローヌ川の上には見えないが、北斗七星と対になる星の並び「秋の大びしゃく」は、9月下旬の深夜～未明には見える。そして2つのひしゃく星の合計が14であることに気づいたとき、ゴッホは、まさに奇跡、神の啓示のように思えたのかもしれない。北斗七星と秋の大びしゃくが、イエスの元に集う十二使徒をも象徴することになるからだ。

「ローヌ川の星月夜」はゴッホにとって、「アルルに集う画家仲間たちとの共同生活」という理想・夢そのものであり、そしてまた、神の御業の表れである星空に奇跡的な配置で集う星々を神の子イエス・キリストと十二人の使徒に見立てた構図で描いた、ゴッホ会心の自然宗教画でもあったと、私には思える。

私は以前からゴッホに興味があったわけではなかったが、今回、絵に描かれた星空に対して天文学的な視点から考察してみると、まるで120年前のゴッホと時空を超えた対話をしたかのような気がし、ゴッホがずいぶん身近に感じられるようになった。

とても楽しい体験だったので、謎の多いゴッホの他の星空の絵についてもいつか調べて、その心に思いをはせてみたい。

謝 辞

ゴッホ研究の第一人者である大阪大学文学部の圀府寺司教授、近代美術の専門家である大阪市立近代美術館建設準備室の小川知子主任学芸員には、美術の素人である筆者の“思いつき”に興味をもっていただき、専門家としてのアドバイスや励ましをいただきました。深く感謝いたします。

ゴッホの生涯と星空を描いた作品については、プラネタリウム映像『ゴッホが描いた星空』[15]によくまとまっています。本記事で紹介した“秋の大びしゃく仮説”も、『ゴッホが描いた星空』を鑑賞している時に着想しました。とても美しく格調高く、そして天文学的にも興味深い作品ですので、機会があれば、ご覧になってみてください。

※補遺

本稿は、天文教育2012年1月号[19]に掲載されたものに、一部加筆した。

また、本稿のテーマに関連して、2011年9月23日、圀府寺教授、小川主任学芸員を講師にお招きし、当館でスペシャルナイト「ゴッホ作『ローヌ川の星月夜』のナゾ」を開催した。

文 献

- [1] ファン・ゴッホの生涯や絵画におけるモチーフの意味などは、圀府寺司(2009)『ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争』(小学館)に詳しい。
- [2] 圀府寺司 (2011)、私信, 大阪大学.
- [3] G. Masi & A. Basso (2004), “1st Virtual Meeting on Amateur Astronomy”,
<http://www.bellatrixobservatory.org/cvaal/37/>
- [4] WebExhibitsファン・ゴッホの手紙検索
<http://www.webexhibits.org/vangogh/>
- [5] フィンセント・ファン・ゴッホの書簡集
<http://vangoghletters.org/vg/>
- [6] C. Flammarion, “Les Etoiles”(1882), p166
- [7] 国立天文台・編(2011)『理科年表』, 丸善, pp.108-110.
- [8] 理科年表オフィシャルサイト(2008), FAQ「なぜ夕日は赤く、空は青いのですか?」, 国立天文台・丸善,
http://www.rikanenpyo.jp/FAQ/kisyo/faq_kisyo_005.html

- [9] 鈴木雅之氏のホームページで計算した。氏のホームページはD.Green氏の大気減光のデータ[10]を基にしている。
<http://homepage2.nifty.com/mtnsuzuki/AE.htm>
- [10] Daniel E. Green (1992), International Comet Quarterly, Vol.14, pp.55-59,
<http://www.icq.eps.harvard.edu/ICQExtinct.html>
- [11] 西はりま天文台なゆた望遠鏡の「観望性能」から次のように計算した。なゆた望遠鏡は口径が2mで、眼視装置の視認限界は13~14等級、色識別限界は8~9等級とのことである(http://www.nhao.jp/~tsumu/2m_tel_project/Cnspt_of_our_prjct/consept-1.html)。背景となる夜空の明るさにもよる[12]が、(望遠鏡などを使わない)肉眼の視認限界が6~7等級とされている[13]ので、なゆた望遠鏡の集光力と肉眼の集光力とでは7等級の差がある。したがって、肉眼での色識別限界は、なゆたの色識別限界-7等級=1~2等ということになる。
- [12] 臼井正(2007),「天文教育」2007年3月号, p.35, 「続・天の川が見える怪」に詳しい。
- [13] International Dark-Sky Association などのデータによる, http://en.wikipedia.org/wiki/Bortle_Dark-Sky_Scale
- [14] 小川知子主任学芸員(2011)、私信, 大阪市立近代美術館建設準備室.
- [15] 株式会社イーハトーヴのホームページ, プラネタリウム「ゴッホが描いた星空」
<http://www.ihatove.co.jp/program/gogh.pdf>
- [16] ファン・ゴッホ美術館のホームページ「フィンセント・ファン・ゴッホの生涯」
<http://www.vangoghmuseum.nl/vgm/>
- [17] A.Boime (Dec.1984), Arts Magazine, p86.
- [18] フラマリオンの著作 [6] のアーカイブを <http://www.archive.org/stream/lestoilsetles00flam#page/166/mode/1up> で見ることができる。
- [19] 石坂千春, 天文教育2012年1月号, p83.